



THINK × ACT  
KANSAI  
UNIVERSITY



# CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning  
**Newsletter**



関西大学 教育開発支援センター  
ニュースレター

March 2012

08  
vol.



## 教育とITの共存は世の常

教育開発支援センター  
副センター長 山本敏幸

以前、TLC (The Learning Channel) でトマス・エジソンの映写機（映写機機）の発明の歴史を取り扱っている番組を見たことがある。その中で、発明した映写機を普及させるために、エジソン自身がプロモーションフィルムを作成していたことを取り上げていた。今のハリウッド映画文化を夢見ていたエジソンが、映写機を使って数々のプロモーションフィルムを作成したことがわかった。そのようなプロモーションフィルムの中で目を引いたのは、映写機のテクノロジーはかつて黒板が今日の教育に導入された時以上に教育のダイナミックスを変革するという主旨のプロモーションフィルムであった。エジソンも最先端のITである映写機が当然のように教室で利用されることを描いていたようだ。

今でこそほとんどの教室はスマートクラスルームとなり、ビデオやDVD、パソコンの画面をプロジェクタを使いたく受講生に見せ、教員が伝えたい情報や知識をドラマチックに見せることができる。映写機の発明以来、今日のスマートクラスルームの普及まで119年の歳月を要している。

さて、汎用型のパソコンが発明されて教育現場で使われるようになるようになるまでに何年の歳月が経ったであろうか。電算機が出現したのが1940年頃で、日本でもそろばんの達人と大型電算機とどちらが速く計算が出来るかを競うようなテレビ番組をご記憶の方もおありであろう。

汎用型のパソコンが発明されたのは1977年頃で、まだエジソンが映写機を発明してからスマートクラスルーム化になるまでの時間に比べると3分の1の時間である。

近年、教育工学が進歩し、教育現場でのICT活用が求められるようになると、どのように学習をさせれば効果的に学習を促進できるかがだんだん理解されるようになってきた。手を使いインテラ

クションが豊富なアクティブラーニングをhands-on、heads-onでドラマチックにかつダイナミックにコミュニケーション取る教育が有効であることがエドガー・デールなどの研究成果から見えてきた。

本学のように多人数講義形式の授業形態が多い大学では、1人の担当教員が限られた授業時間内に個々人の受講生とコミュニケーション取ることができる機会が非常に限られている。このような直接面接型での学習環境が限られている状況では、パソコンなどのICTを活用してインターネット上にバーチャルな世界に学習空間を延長し、アクティブラーニングを実践する場になりうるのではないだろうか。

また、今後は、インフルエンザの流行や流行性のウイルスなどのため、あるいは、台風や地震等の自然災害のために長期の学級閉鎖や学校閉鎖を余儀なくされるような状況を想定しなければならない。最悪、大学が半年や1年授業を行えなくなることも想定しなければならない。このようなリスクは今の教育の現場には常につきまとるものである。こういった状況では、いち早く元の状態に復帰できるレジリエンシー（回復力）を備えた体制が、企業のみならず、教育機関でも必要となってくる。つまり、そのような状況下でも、滞りなく学習ができ、いち早く元の状態に復旧できるような大学が必要となってくるのではないだろうか。そのような状況下でも本学が他大学の見本となるロールモデルとして先駆的な役割が果たせばすばらしいことであるし、授業が滞っているような他大学への貢献もできるし、限られた4年間の時間で子供から大人に育っていく大学生への教育が継続できることになる。

このような役割を果たすにはICTとの共存が、エジソンが夢描いたように、不可欠である。CTLはその最先端のICTと教育の共存関係を担う役割を果たさなければならないのではないだろうか。

## フォーラム・セミナー報告

### 第6回FDフォーラム

## 「第三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」最終成果報告会を開催しました



「第三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」最終成果報告会の様子

2012年1月28日に、CTLが運営してきたGP「第三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」の最終成果報告会を三部構成で開催しました。

第一部では、取り組みを通じて得られた成果と残された課題が何であり、今後どのように事業を展開してゆくのか、これらを軸に積み重ねてきた実践知を織り交ぜながら報告を行いました。なかでも報告の中心となるLAの業務の分析や活動の軌跡については、実際にLAの育成や支援にあたった三人のAS (Advisory Staff) が、それぞれの担当業務について報告しました。これは、その仕事内容がなかなか見えにくい支援業務に与るスタッフたちの健闘ぶりについて、さらには、取り組みの実施・運営においてはそうした支援業務こそが本質的に重要であることに

ついて、あらためてご理解を得られればと願ってのことです。

続く第二部では学外から有識者をお招きして、それぞれ短時間ではありましたが、ご講演を頂きました。富山大学の橋本勝氏には「学生と授業を楽しむコツ」、同志社大学の山田礼子氏には「初年次教育とアクティブ・ラーニング」、京都大学の溝上慎一氏には「この一年のアクティブラーニングへの取り組み・展開を振り返って」という演目で、私達の取り組み今まで振り返り、今後を展望するに当たって貴重なお話を拝聴することができました。

その後の第三部では「アクティブ・ラーニング入門一歩前」というタイトルの下でパネルディスカッションが執り行われました。第一部ならびに第二部の内容についてフロアから寄せられた質問に時間の許す限り丁寧にお応えした後、LAとLA候補生を交え、こちらも短時間ではありますでしたが、ディスカッションを執り行いました。アクティブ・ラーニングの現場からの生の声を少しでもお届けできたのではないかと思います。「アクティブ・ラーニング」は端的に言って日本ではまだ未成熟な分野です。学生をアクティブにするために試みることのできる手段や手法を発掘してゆくには、入念な準備

はもちろん、時にかならずとも効率的とは言えないtrial and errorの繰り返しが必要になります。そうした不断の探求、彷徨、模索をともなう取り組みだからこそ、多くの方々の協力と、スタッフの献身的なサポートとフォローを欠かすことはできません。本取り組みが「第三者協働」を謳ってきたのも、翻って考えてみると、そぞろとしたアクティブ・ラーニングの本質を直観的に捉えていたからこそなのかも知れません。さて、本取り組みはGPとしては今年度で終了いたしますが、LAの育成・活用を通じたアクティブ・ラーニングの展開そのものは、CTLとして今後も継続していくこととなっています。今後とも、かわらぬご協力を賜れば幸いです。

(教育推進部 三浦真琴・須長一幸)



第三部では橋本氏、山田氏、溝上氏に加え、本学教職員やLA、LA候補生も登壇した

### 当日のプログラム

13:00~13:10	開会挨拶 市原 靖久（副学長・法学部 教授）
13:10~13:55	第一部「第三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」その成果 須長 一幸（教育推進部 准教授） 遠海 友紀・齊尾 恭子・今岡 義明（アドバイザリースタッフ）
14:10~15:40	第二部「識者・先駆者に聴く」 橋本 勝氏（富山大学 教授）「学生と授業を楽しむコツ」 山田 礼子氏（同志社大学 教授）「初年次教育とアクティブ・ラーニング」 溝上 慎一氏（京都大学 准教授） 「この一年のアクティブラーニングへの取り組み・展開を振り返って」
15:55~17:25	第三部「アクティブ・ラーニング入門一歩前」 橋本 勝氏・山田 礼子氏・溝上 慎一氏 三浦 真琴（教育推進部 教授）・岩崎 千晶（教育推進部 助教） 竹中 喜一（授業支援グループ職員） 嶋本 美幸・樽谷 直樹・宮元 綾子（ラーニングアシスタント） 中村 文豪（ラーニングアシスタント候補生）
17:25~17:30	閉会挨拶 田中 傲也（CTL長）

### 「LA、全国へ向けて発信!」

2012年2月25日・26日に追手門学院大学で開催された「学生FDサミット」において、本学LA (Learning Assistant) の岩尾咲子さん（文学部2年）、榎本慎也さん（環境都市工学部3年）、國谷みなみさん（政策創造学部3年）、橋本光太郎さん（システム理工学部3年）の4名がLAの取り組みについて発表しました。



発表の準備に取り組むLA

「学生FDサミット」は年2回開催されているイベントで、全国のFDに関わる学生スタッフや教職員が一堂に会する場です。今回は全国56大学から340名が参加したということで、関西大学LAの取り組みが全国の大学に広く周知される契機であったといえます。

発表では、4名のLAが普段の業務で培いつづけているプレゼンテーション能力を遺憾なく發揮し、参加者に業務内容や業務への熱い思い（「知的探求の面白さを伝えたい！」など、それぞれのLAが持つ「野望」）を伝えました。

限られた時間でしたが、それらの熱い思いは参加者にも伝わったのではないでしょうか。発表後にあった懇親会などで「私の大学でもやってみたい」「制度として開始するまでどんな準備だったか」など、全国の学生や教職員から問い合わせを頂いたことからもうかがえます。

今回の発表に至るまでの準備はLA自身が主体的に行いました。LAの業務内容は担任者や科目の特性により多様であり、4名のLAであっても「4者4様」といえます。このような状況の中で発表内容の合意形成は容易ではなかったかもしれません。しかし、彼ら彼女らは納得いくまで議論を重ね、その結果、LAとしての全体性を説明しつつも多様性も活かすという素晴らしい発表内容になりました。

このように、学内にとどまらず学外でも活躍しつつあるLAをCTLとして応援し続けていきたいと考えております。  
(LA・政策創造学部2年 中村薰平)

### Learning Assistant

#### LA活動報告

### 「LA、海外でも活躍!」

この度は同じくLAの堀尾裕一さん（社会学部3年）と共に課外活動の一環として、台湾で開催された国際学会「TELDAP2012」の運営スタッフを務めてまいりました。学会の2日前から学会会場でスタッフのための研修を受けた上で、学会の設営を手伝いました。TELDAP 2012は、情報通信技術（ICT）を中心として、自然科学や教育など様々な分野の発表が様々な国籍の発表者によってなされる学会です。すべての会議は中国語と英語の同時通訳で行われました。

学会中は専任スタッフ同様に学会運営業務を担当しました。本学でも日常的にLAの業務の中で、プロアクティブに行動することを実践してきたので、学会主催者のサイモン教授からも仕事ぶりをほめてもらうことができました。学会責任者の期待以上の仕事ができました。学会中は英語だけでのコミュニケーションでしたので、たいへんでしたが、貴重な体験をすることができました。

学会中は発表会場内で登壇者からの著作権譲渡の書類作成補助、登壇者のIT活用サポート、学長のサポート業務などをおこないました。おかげで、さまざまな分野の最先端の発表を聞くことができました。

今世界が、どんなアプローチで、何を生み出そうとしているのか。一方私たち学生はこれら情報技術と共に「何が出来るのか」。新学期は、今回の課外活動での体験を、受講生皆さんと共に考えるきっかけとして共有していきたいと考えております。  
(LA・政策創造学部2年 中村薰平)



セッションで座長補佐を務めるLA  
(左:堀尾、右:中村)

### 寺崎昌男客員教授講演会を開催しました

#### FD・SDの新しい局面 —「教職協働」そして大学院FDを考える 大学の教職員を志す学生に知ってほしいこと—

2011年12月16日、関西大学客員教授寺崎昌男氏による標記演題の講演があった。氏は大学を巡る大きな変化として、教職員・学生・卒業生全てを含んだ総合的な力量が求められること、ピラミッド型序列の中の“one of them”を脱し、独特の個性を有する“only one”たるを求められること、超少子化への対応が不可避であること、主に以上の三つが眼前にあるのを踏まえた上で、大学教育を見直すための視点についてお話をされた。

学生的自学心をどのように喚起するかが現在の大学教育の課題である。学生が自学心を十分に持てない理由は単一ではないが、学生の自学自習を求める大學教育の在り方に問題がある。最近ではactive learningやdeep learningなど、学生自身の考察を促し、何を学ぶべきかを理解させる工夫のある授業が展開されているが、その効果的な運営が教師にとっての新たな課題であり、FDの新しい局面である。大学の授業科目(course)は学生にとっては「歩く道」である。教師はこれを先導し、あるいは伴走する存在である。このように捉え直した時、active learningやdeep learningにつながる道筋が見えてくる。同時に学生が

FDにおける重要な協力者となってカリキュラム作りに参加することも可能となる。なお大学院のFDについては大学院教育の指南書のない我が国では教育・指導の意味を見直すことこそが新たな出発点となる。

SDについては、その浸透、発展に見合うカリキュラムがない。カリキュラムには広がり(scope)と順序(sequence)が不可欠であるが、職員に様々な部署を渡り歩かせる広がりはあっても、知識や技能の蓄積は経験に任せられるばかりになっている。したがって計画性あるカリキュラムを編む必要がある。また職員は学生にとって最も身近な年長者であり、彼ら彼女たちのキャリアモデルとなることを失念すべきではない。

FD・SDともに新しい局面を迎えること至るが、肝要なのはいずれも大学の日常の活動の中に自然に溶け込み、文化となることである。教員と職員が車の両輪に例えられることしばしばであるが、車軸をどうやって作るか、そこに駆動力を如何に伝えるか、二つの車輪がどの方向に進んでいくのか、そのことに目を向けるべきである。教員は最終的に全国および国際学会の水準に到達するという宿命を帯び、職員



寺崎客員教授による講演の様子

は全てのことについて何事を知り、いくつかのことについては全てを知ることが求められるが、両者が相互にミッションを理解した上で協働が可能なとなる舞台を見据え、大学の多機能化に応えていく必要がある。その舞台としてカリキュラム・マネジメントが考えられるが、協働の場としての機会は自校教育に大きい。以前に比して大学と学生のつながりが希薄となった今、自校教育の意義はさらに大きい。

大学は知識と情報を与えるが、イマジネーションをかき立てる方法で伝えることこそが肝要である。大学の社会的機能は確かに多様になっているが、伝え方の基本を忘れてはならない。  
(教育推進部 三浦真琴)



CTLでは、高等教育に関する様々な書籍をご用意しています。市販の図書に加え、各大学の紀要や報告書等も充実しています。閲覧・貸出は自由ですので、お気軽にお越しください。ご推薦頂ける書籍等も随時受け付けています。CTL（千里山キャンパス第2学舎1号館1階）までお問い合わせください。

### 新着書籍例(いずれも貸出可能です)

#### 『学生・職員と創る大学教育』

清水亮・橋本勝(編著) (ナカニシヤ出版)

#### 『変貌する世界の大学教授職』

有本章(編著) (玉川大学出版部)

#### 『協同学習入門—基本の理解と51の工夫』

杉江修治(編) (ナカニシヤ出版)

#### 『教育現場の協働性を高めるファシリテーション実践学』

武田正則(著) (学事出版)

#### 『ポートフォリオが日本の大学を変える』

土持ゲーリー法一(著) (東信堂)

#### 『「学びの環境デザイナー」としての学校事務職員』

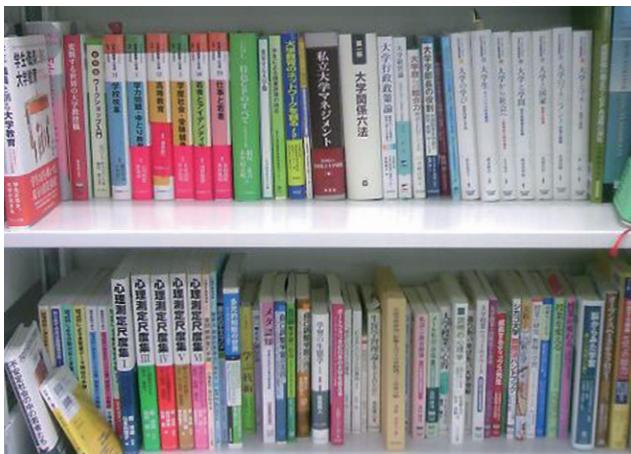
藤原文雄(著) (学事出版)

#### 『フロービジョン喜びの現象学』

M.チクセントミハイ(著)、今村浩明(訳) (世界思想社)

#### 『Learning Trajectories, Innovation and Identity for Professional Development』

Anne Mc Kee, Michael Eraut Editors (Springer)



## From CTL事務局

11年前、関西大  
学では初めての本

格的な実施となる授業評価アンケートに  
関わらせていただいた職員の一人としてその当時のこと、そして現在所属する教学組織について少し記  
したいと思います。

本学の授業評価アンケートは、教  
学方針に基づき平成12年に全学共通  
教育推進機構の授業評価部門委員会  
で検討され、平成13年度から実施さ  
れました。当時、他の大学でもほと  
んど実施されていなかった教育活動  
でしたが、既に実施していた国公立  
大学への聞き取りや調査を行い、  
本学の授業評価アンケートに活かさ  
れました。アンケート作成における

過程では、数多くの委員会が開催さ  
れ、各教学組織を代表する委員によ  
り質問項目の一つ一つについて詳細  
に議論されアンケートに反映されま  
した。他の大学でもほとんど実施さ  
れていなかった授業評価アンケート  
が本学で行われることになる瞬間で  
した。職員として本学の伝統ある教  
学の重要な事業に関わらせていただ  
いたことは、職員として誇り高い業  
務の一つであります。

そのとき以来、職員として久しぶ  
りに関わらせていただくことになっ  
た教学組織は大きく変貌していま  
した。教学組織では、新たに教育推進  
部が設置され、事務組織では、学部  
事務室機能が改編され教務センター

になり、その変化は国内屈指の伝統  
ある私立大学の教育のさらなる進化  
を大いに期待させるものです。その  
教学組織の中枢となる教育推進委員  
会や教育開発支援センター委員会で  
の議論は、本学の教育の先進性をさ  
らに強く意識させるものとなってい  
ます。また新しい教育手法を伸展さ  
せるための種々のプロジェクトも立  
ち上げられ、斬新な取り組みにも挑  
戦され、まさに考動し、躍動してい  
る感があります。その伝統ある本学  
の教學組織の積極的かつ真摯な改革  
の取り組みに、職員として関わるこ  
とで寄与できればと考えています。

(義)